

I 学校の概要

国際理解教育推進モデル校事業 まんのう町立満濃中学校

◆生徒数及び教員数

○生徒数

第1学年	第2学年	第3学年	特別支援	全校
5学級 146名	5学級 140名	5学級 164名	4学級 21名	19学級 471名

○教員数 34名

◆学校の特色

素直な生徒、規範意識の高い生徒が多く、落ち着いた学校生活を送ることができている。新制服の導入や校則の改定に向け、性の多様性を理解し、学級会での多様な意見を取り上げた。学級委員、生徒会役員による生徒企画委員会での話し合いと、学級会を何度も往復し、最終的には生徒会役員による職員会での提案や生徒総会で共通理解を図るなど、生徒一人ひとりの意見を大切にしながら生徒会活動を進めている。また、昨年度の地域のボランティア活動にはのべ174名の生徒が積極的に参加しており、地域の大人と交流しながらふるさとの温かさやよさにふれることもできている。さらに、夏休みには12名の生徒がシンガポールに数日間滞在し、現地の学生と交流する町国際交流協会主催のプログラムも今年度より再開した。

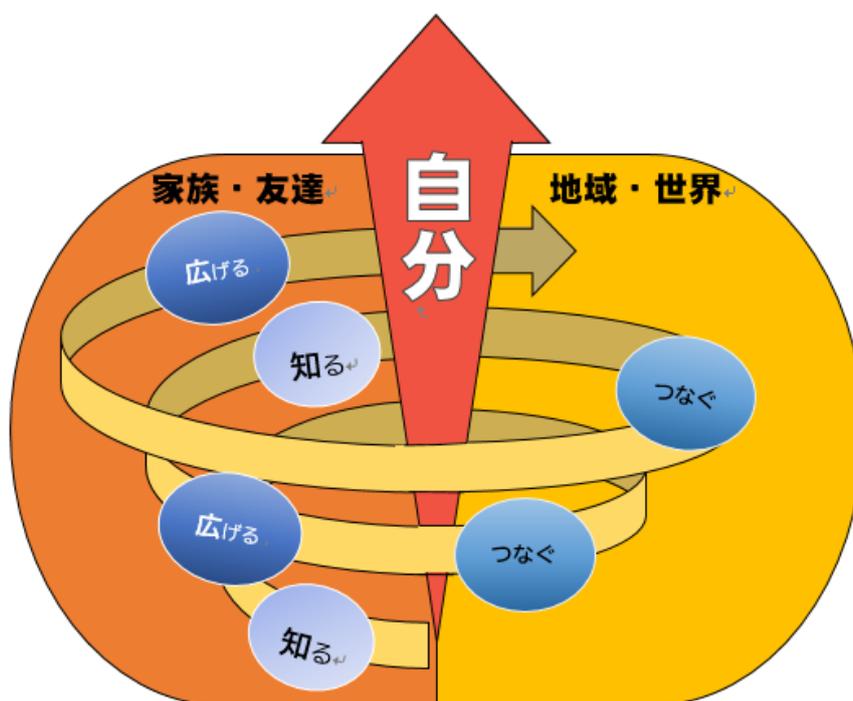
II 研究主題等

研究主題

まんのう町への誇りや外国(人)への関心を持ち、広い視野で異文化を理解するとともに、国際社会に生きる人間として望ましい態度や能力を育てる。

◆研究主題設定の理由

昨年度全国学力・学習状況調査生徒質問紙の「外国の人と友達になったり、外国のことについてもっと知ったりしてみたいと思いますか」という質問に対して、「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と肯定的に回答した3年生は62.9%であった。これは県64.9%、全国66.8%から下回っている。また、「日本やあなたが住んでいる地域のことについて、外国の人にもっと知ってもらいたいですか」は65.7%であり、県64.5%、全国63.2%と同程度であるものの、前回(平成31年度)の同調査74.1%と比べると大きく下降している。本校の恵まれた環境を最大限に活用し、これまでの教育活動の意義や価値について国際理解教育の視点から教師が再確認することで更に充実したものになると考え、本研究主題を設定した。



知る	異国の文化を知り、自国や地元の魅力についても再確認する。他者のよさも理解する。
つなぐ	得た知識、自分の考えを他者と交流する。人と人、学校と地域のかけはしとなる。
広げる	他者から学び、自分の視野を広げる。地域や世界とつながり、自分の可能性を広げる。

◆研究内容及び方法

- 1 英語科において月1回のオンラインでの英会話を実施し、英語によるコミュニケーション能力を育成する。町の海外派遣事業を利用し、シンガポールでの生活やコミュニケーションを体験し、まんのう町の文化を現地の人々に紹介したり、現地で学んだことを集会で全校生に共有したりする。
- 2 まんのう町の農作物や文化、海外の国々の言語や生活習慣について図書館やタブレット端末を利用して調べ、まとめる。年間2回の縦割り学級編成による授業では、異学年の生徒との意見交流を通して、自分の考えを深めることができるようにする。
- 3 公民館でのボランティア活動に参加した際に、中学校で学習したことを地域に広める。また、ボランティア活動に参加して学んだことを全校生に発表する機会を設定する。
- 4 社会科、美術科、英語科で公開授業を実施し、大学の先生から指導を受け、全教職員の授業づくりの視野を広げる。

III 研究実践

◆指標設定と達成に向けた取組

1

(生徒アンケート)

外国の人と友達になったり、外国のことについてもっと知ったりしてみたいと思いますか。

指標 「①思う+②どちらかといえば思う」の合計



(生徒アンケート)

日本やあなたが住んでいる地域のことについて、外国の人にもっと知ってもらいたいと思いますか。

指標 「①思う+②どちらかといえば思う」の合計



指標の達成に向けた実践

(1) 英語科オンライン英会話

毎月1回、フィリピンのネイティブスピーカーとオンラインによる英会話を実施している。「学校」「好きなもの」「日常生活」等月によってテーマを設定し、ワークシートを活用しながら会話している。ネイティブスピーカーは生徒の英語力に応じて丁寧な指導をもらえるので、生徒も楽しんでいる。基本的には生徒がテーマに関する情報を発信しているが、時間の余った生徒は自ら質問をしている。他国の文化について知ること喜びを感じている生徒、英語の学習に対して前向きになった生徒が増えた。



(2) 町海外派遣報告会

町が主催している海外派遣事業で、2年生12名が夏休みにシンガポールを訪問した。現地では高校生や大学生と交流し、ホームステイも体験した。学んだことを発表した。また、事前の縦割り学習で出た、習慣や文化についての疑問を現地の人に質問し、その結果を報告した。聞いていた生徒は、発表生徒に次々と質問するなど興味や関心を高めていた。その後、香川大学教員から、道德の視点も踏まえて国際理解、国際貢献について指導をいただいた。



<生徒の感想より(一部抜粋)>

- 「無意識の偏見」という言葉を聞いて、自分が「思ったより〇〇」という言葉をよく使っていることに気が付いた。固定観念で終わらず、関心を持つことが大事だ。(2年生)
- 世界のあらゆる国のことを他人事と思わずに、身近にいる家族や友人に置き換えて考え、相手を尊重することが大切であるということが分かりました。(3年生)

(生徒アンケート)

各教科等で学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行っていましたか。

指標 「①当てはまる+②どちらかといえば当てはまる」の合計



(生徒アンケート)

自分と違う意見について考えるのは楽しいと思いますか。

指標 「①当てはまる+②どちらかといえば当てはまる」の合計



指標の達成に向けた実践

(1) まんのう町や世界の国々の生活や文化について調べたことを共有する (縦割り学級編成)

美術科ではまんのう町内で生産されている野菜や果物を絵の具に加工する授業を実施した。地域のよさや地産地消の重要性の再確認ができた。また、ユネスコ無形文化遺産に登録されたの綾子踊りについて調べた。自ら進んで全国の風流踊りについて調べる生徒もいた。また、社会科、英語科では、アジアの国々の言語、衣食住、食事、観光地について書籍やタブレット端末を用いて調べた。その内容を画用紙やタブレット端末を利用してわかりやすくまとめた。そして、これらの学習内容について、1、2年生が発表し、3年生が質問したり、発表の仕方について助言をしたりした。



(2) 世界の格差について考える (縦割り学級編成)

世界経済の仕組みを理解すること、自由貿易や経済のグローバル化が引き起こす様々な問題に気付くこと、格差問題の解決に向けて国際協力のあり方や自分の行動について考えることをねらいとして「貿易ゲーム」を実施した。複雑な現実世界をモデル化したものであるが、先進国と発展途上国の経済的・社会的格差などの問題について考えることができた。



(生徒アンケート)

自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立などを工夫して発表していますか。

指標 「①発表していた+②どちらかといえば発表していた」の合計



(生徒アンケート)

地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか。

指標 「①当てはまる+②どちらかといえば当てはまる」の合計



指標の達成に向けた実践

(1) 公民館でのボランティア活動

毎年11月に校区内の7つの公民館で開催される公民館祭りにおいて、有志の生徒がスタッフとして手伝いをしている。今年度は合計80名ほどの生徒が参加し、地域の方々と協力しながら公民館の催しを盛り上げた。また、代表生徒が中学校で地域や世界について学習した内容を発表し、地域に広げることができた。今回の活動を通して、郷土のために自分ができることは何か考え、積極的にボランティア活動に参加した生徒、地域の方々と交流し、自分たちが温かく見守られているということを実感できた生徒もいた。ボランティア活動を通して感じたことをランチルームで全校生に伝えた。



(2) 平和学習発表会

今日世界の人々が抱えている問題の一つである平和について学習しているが、今年度は三年生による発表に加えて、コンピュータ部、美術部の有志が高松市の戦争跡地を訪問した。世界の日本人としての自覚をもち、他国を尊重し、国際的視野に立って、世界の平和に寄与するためにはどうすればよいか、考えたことを発表した。



<生徒の感想より(一部抜粋)>

- 僕はこれまでボランティア活動は面倒くさいものだと思って参加していませんでした。しかし、参加してみるとボランティア活動は人と人の関わりを深めるものであると感じました。(2年生)
- 僕は友人に勧められて参加しましたが、地域の人たちが優しく教えてくれました。おかげで自分も分らないことがあれば遠慮せずに聞けるようになりました。(2年生)

(教師アンケート)

互いの「違い」を「違い」として認め合い多様な価値観を受容しながら共に生きようとする意欲や態度を培う「多文化共生」を育む視点で指導に当たっているか。

指標 「①できている+②どちらかといえばできている」の合計



(教師アンケート)

教科の授業時間だけでなく、様々な時間で国際理解教育の要素を意識して指導に当たっているか。

指標 「①できている+②どちらかといえばできている」の合計



指標の達成に向けた実践

(1) 授業公開

9月に社会科、美術科、英語科の授業を公開し、大学教員より指導をいただいた。1年社会科地理的分野で、宗教と生活や文化との結びつきについて考えた。「違う宗教の生徒同士が同じ学校にいて、給食を食べる時に困ることはないか」という課題について考え、具体的な給食のメニューをつくった。授業を通して、異なる文化同士が共存することの難しさや、日本人が理解しづらい宗教と生活が密接に関わっていることに気付いた。また、2年生英語科では、日本の文化をフィリピン人に英語で発信したり、フィリピンの文化について尋ねたりし、コラボノートを使って、生徒一人ひとりが会話から知り得たフィリピンの文化について全体で共有した。そして、3年美術科では、来年度開催される第6回瀬戸内国際芸術祭 2025 をクローズアップし、海外作家が香川県や瀬戸内海に作品を展示する理由について、作家の心情を考察し、アート作品を通した国際的なつながりの必要性とその価値について考えた。作品を様々な視点で鑑賞し、他人の意見を聞いて自分の考えを広げることができた生徒が多くいた。



(2) 教員研修

大学教員による研修を2回実施し、「道徳の内容項目『国際理解、国際貢献』の題材において、生徒がのめり込めるような指導の手立て」「探究的な見方や考え方を働かせる総合的な学習の時間の授業づくり」について指導をいただいた。若手教員からベテラン教員まで指導経験はそれぞれであるが、自身の学力観、指導観、学校観を揺さぶられ、更新する好機となった。



IV 研究の成果と課題

◆成果

- 「社会の授業で習った世界の宗教と同じように他国の食文化や生活習慣の違いなどをお互いに尊重し合っているいろいろな国や文化を知りたいと思いました。」など各教科等で学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめて感想を書く生徒が増えた。11月の校内生徒アンケート「各教科等で学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行っていましたか。」では78.5%の生徒が肯定的に回答しており、5月より4.0ポイント上昇した。
- 12月、第1学年の道徳では、『違いを乗り越えて』という題材をもとに、多文化の理解を深めることについて学習した。授業後の感想には、「お互いがそれぞれの国において“当たり前”で“普通”のことを主張しているだけ。押し付け合うことで相手を否定してはいけない。」「食文化を知っていれば、自分が許せる範囲の食べ方ができたかもしれない。」「知らないから、分からない。分からないから、分かり合えない。お互いに知ろうとすることが、お互いを認め合う第一歩だ」など、これまでの国際理解教育が生徒の中に根付いていることを実感した。
- 休日に自ら進んで国際交流のイベントに参加する教師が数名おり、その経験を生かして子どもに還元するための活動を企画し、外部講師を招へいするなど教師の意識も高まっている。また、新婚旅行に海外へ出た教師も数名いたので無理のない範囲で体験談を話してもらおう時間を設定したい。



◆課題

- △ 県学習状況調査の結果より、「聞く」では、話の概要を理解する力が向上した。しかし、単語力、文法力、また会話特有の表現などの知識が不足しているため、短い英文を正確に聞き取ること、対話を聞いて適切に応じることができない生徒が多かった。話の概要は理解できても、どう答えたらよいのか分からない生徒が多いと考えられる。また、「書く」では、言語材料を正しく選択する力はあるものの、会話表現は正しく選択できていなかった。これは会話特有の表現を覚えていないことが原因だと考えられる。さらに、英文を書く問題の正答率は低かったが、初歩的な英語を使って、対話の流れに沿った文を書く問題の正答率は県平均よりも高かった。このことから、初歩的な知識しか身に付いていないことが分かる。以上のことから、定期テストや小テストを利用して、生徒の知識のつまずきを把握して分析すること、会話特有の表現を定着させるために帯活動等を活用して会話活動の充実を図ることを継続したい。オンライン英会話で高めた英語学習への意欲を自信に繋げるために、生徒の書く力をさらに磨きたい。
- △ 11月の校内生徒アンケート「自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立などを工夫して発表していますか。」では68.1%の生徒が肯定的に回答しており、5月より2.4ポイント上昇しているが、生徒の発表の様子を見ると、原稿を見てそのまま読み上げたり、下を向いたまま話したりしている場面もあった。これからは、発表の仕方についても各教科で指導を積み重ね、レベルアップが図れるようにしたい。
- △ 11月の校内生徒アンケート「将来の夢や目標を持っていますか。」では68.5%の生徒が肯定的に回答しており、5月より4.2ポイント下降した。全国学力・学習状況調査生徒質問紙や香川県学習状況調査では、全国、県との比較において下回っていることが積年の課題であり、本研究を通して改善させたかったもの思うようには改善されなかった。しかし、今後も国際理解教育の視点で教育活動を展開し、教師が夢を語ることで、生徒が世界に視野を広げて夢や目標を持つことができるようにしたい。
- △ 予算について浅薄な計画であったため、有効に執行することができなかった。したがって、町教育委員会をはじめ多くの関係者に迷惑をかけてしまった。